

国際化とは

Internationalization

Sogo OKAMURA

Professor Emeritus, University of Tokyo
Executive Vice President, IATSS

岡村總吾
東京大学名誉教授
本学会副会長

最近わが国では各方面において国際化の必要性が叫ばれている。政府の審議会の答申にも国際化、あるいは国際協力などが重要な柱となっていることが多くなった。本学会も国際交通安全学会で、交通と安全にかかわる諸問題に対して国際的視野から学際的に取組むことを目的としているので、この際、果たしてわが国が国際化しているか否かを検討することも意味のあることと思う。

そもそもわが国は地理的には所謂極東の孤島に位置し、また歴史的には明治維新以前300年近くも時の政府が鎖国政策をとり、外国との交流を嚴重に禁じていたため、国民が自由に国際交流を行うことができるようになったのは、ほんの百年余り以前からのことである。その為もあって日本語は今の所わが国以外では殆んど通用していない。また幸か不幸か我々は単一民族で、均質な社会で生活することに慣れていているため、雄弁よりも沈黙を、強い個性よりも調和を尊び、以心伝心とか腹芸とかの言葉にも示す通り、自己の考えを丁寧且つ執拗に説明することをしないで、相手が理解してくれることを期待する傾向がある。このような言語障壁や考え方の相違により、他国の人々の誤解を生むことが多く、現在においては欧米諸国は勿論、アジア、アフリカなどの国々と比べても、わが国は国際性に乏しいといわざるを得ない。

さて国際化とはどういうことであろうか。難しいことはよく分らないが、多分自分の国だけにとらわれなくて、他の国の人々とも自由に理解しあい、交際できるようにすることであろう。このように考えてみると、わが国では口では国際化、国際化と言いながら、実際には必ずしもそうでない事実が多いのに気がつく。

例えばわが国の新聞、テレビなどでは、いつも国際化の重要性を力説している癖に、何か外国で交通事故でもあったら、必ず被害者の中に日本人がいるかいないかに力点を置いて報道する。

外国人は勿論日本人でも、帰国子女など日本語の不自由な子供の教育に不熱心で不親切である。私事に互って恐縮であるが、最近筆者の娘一家が1ヶ年米国に滞在しているが、英語の全くわからなかった小学校一年生と幼稚園児の孫に対して、米国の学校が特別に日系の先生を雇って教育してくれた親切さには感心した。米国では国内に住んでいる子供は、米国人であろうと外国人であろうと、また英語が理解できても、できなくても、これを教育するのが義務であると考えているようである。これに反して、わが国では、日本語のできない子供は、普通の学校では教育する義務がないと考えているような気がする。

この他いろいろ多くの例があるが、要するに国際化を進めるのに最も大切なことは制度をいじくることではなく、我々が皆国際的な視野をもつことと、国際化を実行するのに必要な費用を惜しまないことにあると思う。幸いにして最近発足した当学会の新しい国際事業が、篤志家の多大の御芳志により、十分な資金の裏付けを得て、着々進行しつつあるように見えるのは喜ばしいことである。

原稿受理 昭和60年6月19日